木村定三コレクション銅鏡目録

久保智康(京都国立博物館)
森下章司(大手前大学)

凡　例

・本目録は、愛知県美術館に寄贈された木村定三コレクションのうち、銅鏡資料をまとめたものである。

・配列は、中国・朝鮮鏡、古墳時代仿製鏡(古墳時代倭鏡)、平安・鎌倉時代鏡、不明鏡の順に掲載した。なお後世の踏み返し品も、文様・形態による分類の順に並べたものがある。

・収納箱に木村定三氏がつけた銅鏡名称が記されているが、現在の銅鏡分類の一般名称に改めた。

・記載内容は、コレクション番号、銅鏡名称、面径、重量(グラム単位)、調査・検討所見、墨書等(鏡の収納箱とその蓋・袋・付札などに記された名称などの墨書・印)からなる。墨書のうち、「守一」等は、木村定三氏の要請により熊谷守一氏が記した款記、「定三」とあるのは木村定三氏自身が記した款記や銘記を示す。「朱文長円印」「朱文方印」は印の形状を表したもの。/は改行を示す。

・本目録は、久保智康と森下章司が分担執筆した。服部敦子、長屋菜津子、中村麻里、村瀬可奈、小野康子、林育正が補助した。X線透過撮影写真においては元興寺文化財研究所、赤色顔料の同定には九州国立博物館のご援助を得た。所見について京都大学岡村秀典氏にご教示いただいた。蛍光X線分析装置による測定作業を長屋がおこない、その結果を所見に活用した。撮影は森下による。編集は鯨井秀伸による。

・「愛知県美術館における蛍光X線分析装置による測定」とは、セイコーインスツルメンツ㈱SEA200を用い、その附属定性分析アプリケーション・ソフトが解析した測定結果である。

測定条件：
範　　囲：⌀2㎜
時　　間：100min
環　　境：大気
電圧電流：50kv、200μA

中国・朝鮮鏡

1　細地文花弁文鏡

1　M313　細地文花弁文鏡

面径9.2cm　重量54g

戦国時代(前3世紀)

完形品。薄緑色の銹や白色の泥が付着。

鏡面はほぼ平らで縁部は匕縁。縁の頂部に面をもつ。内区は細文地の上に四つの花文と葉文を置く。花文の中央に円形の凹みが設けてあり、二箇所に黄土色の嵌玉が残る。ガラス製か。地文は菱形文の中に渦巻文を入れ、珠点で縁取りする。鈕座は方格。鈕は小型の半球形。鈕孔は円形で鏡背面よりやや浮いた位置にある。(森下)

(墨書等)蓋：守一「秦/嵌玉細地文鏡」。蓋紙：定三「秦/嵌玉細地文鏡」。布：「貴」印と「嵌玉細地文/鏡」。

2　連弧文縁細地禽獣文鏡

2　M314　連弧文縁細地禽獣文鏡

面径12.3cm　重量146 g

戦国～前漢時代(前3世紀)

完形品だが歪みを生じており、縁にヒビが一箇所はいる。緑色銹とその下の赤銹がみえる。鏡面側には泥が付着。泥の下も緑色の銹で覆われる。縁は平縁。十二弧の連弧文をめぐらす。内区は、菱形文の中に渦巻文を入れ、珠点を連ねて縁取った細地文で埋め、その上に、ほぼ同形の龍文を四つ置く。体の細部は凹線で表現。内側に圏線と素文の圏帯。地文は鈕の脇まで続く。鈕は三弦鈕。鈕孔は研磨で整えられている。(森下)

(墨書等)蓋紙：定三「秦/四虎鏡」。蓋表：定三「秦/連弧文縁四虎鏡」と「淡如水」朱文長円印。蓋裏：「秦/四虎鏡」。布：「貴」印と守一「秦/四虎鏡」。

3　蟠螭文鏡

3　M312　蟠螭文鏡

面径13.7cm　重量170g

前漢時代(前3～前2世紀)

中央で割れている。全面に緑色の銹で覆われ、その下の一部に赤色の銹がみえる。一部は補填したものか。接合部分に付銹あり。鏡面はほぼ平らで、縁部は低い匕縁。内区は四つの菱形文の間に、変形した蟠螭文を置く。周囲を突線による渦文で埋める。線はややぎこちない。その内側は幅広の素文の円圏をめぐらす。鈕は三弦鈕。文様の上面は細かく研磨されている。(森下)

(墨書等)**箱裏：「第拾五号」。蓋：定三「秦/菱様雷文蟠螭鏡」と「淡如水」朱文長円印。布：「秦/菱様雷文/蟠螭鏡」。**

4　蟠螭文鏡

4　M315　蟠螭文鏡

面径14.1cm　重量189 g

前漢時代(前3～前2世紀)

完形品。全面的に銹落しがおこなわれており、文様が潰れ気味の部分もある。外形や匕縁の内側にやや歪みが生じている。鏡面はほぼ平らで縁部は低い匕縁。内区外周に一本の圏線をめぐらし、縁部との間を斜線で埋める。内区は平彫りの蟠螭文を連ねる。蟠螭文の間は渦文で埋める。内側には圏線・素文の圏帯・捩文状の圏線をめぐらす。圏線と圏帯の間も斜線を施す。その内側は渦文で埋める。鈕は三弦鈕。鈕の孔は不整形で鋳バリが残る。鈕から伸びる鋳型の傷が残る。(森下)

(墨書等)**蓋:守一「秦/渦文地蟠虵鏡」。蓋紙:定三「秦/渦文地文蟠虵鏡」。布：「秦/渦文地/蟠虵鏡」。**

5　方格規矩蟠螭文鏡

5　M316　方格規矩蟠螭文鏡

面径13.3cm　重量198 g

前漢時代(前2世紀)

完形品。鏡面は全面に銹落しされ、塗料が塗ってある。鏡背では縁部に銹落しが施されている。強い銹落しのせいか縁にやや歪みが生じている。付着する暗赤色の物質はバリウムホワイトを体質としたレーキ性顔料とされる。鏡面は平らで匕縁。内区は圏線をめぐらした内に、方格規矩と蟠螭文を置く。規矩の上には数条の細線が施される。方格は正方形ではなくやや歪む。蟠螭文は渦状表現で突線によって縁取る。方格には「(魚文)大楽貴富。得所好。千秋萬歳、延年益壽。」という銘文がめぐる。鈕座は龍文で鈕は帯状を呈する。鈕孔は鈕座を一部潰しており、その底は鏡背面よりやや窪む。内区は全体に凹凸がめだつ。内区の範囲や大きさを異にする同文・同型品が久保惣記念美術館所蔵鏡ほかにみられる。(森下)

(墨書等)蓋：守一「秦　鏡」。蓋紙：「秦/規矩蟠螭鏡/銘文/大樂貴富得所好/千秋萬歳延年益壽」。布：「貴」印と「秦/規矩蟠螭鏡/銘文アリ」。

6　重圏銘帯鏡

6　M331　重圏銘帯鏡

面径18.7cm　重量990 g

前漢時代(前1世紀)？

完形品。鏡面鏡背ともに全面に銹落し。鏡面は銀色を呈する。

凸面鏡。平縁。外区は素文。内区は斜行櫛歯文＋銘帯(外圏)＋斜行櫛歯文＋平頂圏帯＋銘帯(内圏)＋斜行櫛歯文＋平頂圏帯＋斜行櫛歯文。外圏の銘は「湅治銅華清而明。以之爲鏡宜文章。延年益壽去不羊。與天無亟如日月之光。千秋萬歳樂未英兮」。内圏の銘は「内而清而以而昭而明而光而象而夫而日而月而□而不而泄而兮而可而□而心而」と読める。鈕座は四葉座。鈕は小さな半球形で鈕孔は円形。外区の内側の段や櫛歯文の上に文様の潰れ部が数箇所認められる。文様や文字の縁は丸くなり、文様の表出が鈍い。(森下)

(墨書等)蓋裏：守一「漢/重圏日月鏡/守一識」。蓋表：定三「漢/重圏日月鏡」と「淡如水」朱文長円印。布：「漢/重圏日月鏡」。

7　細線式獣帯鏡

7　M328　細線式獣帯鏡

面径18.9cm　重量1028 g

前漢時代(前1～1世紀)（伝)楽浪出土

完形品。漆黒色の銹で全面覆われる。楽浪出土鏡に共通する銹の特徴である。泥状の付着物あり。凸面鏡。平縁。外区は素文。外区と内区の間は約4㎜の段差となる。内区は斜行櫛歯文＋獣文＋斜行櫛歯文＋平頂の圏帯＋斜行櫛歯文で構成される。内区主文は四葉座乳で四区分し、間に玄武＋鳥、龍＋獣、虎＋熊、二頭の獣を入れる。鈕座は四葉座で鈕は半球形。鈕孔は円形。鈕、四葉座、乳上に回転の擦痕があり、外区と段にも細かい擦痕。(森下)

(墨書等)蓋：守一「漢／八獣鏡／楽浪出土」。蓋紙：定三「漢／八獣鏡」と「淡如水」朱文長円印。布：「貴」印と「漢／八獣鏡／楽浪出土」。

8　方格規矩鏡

8　M320　方格規矩鏡

面径12.9cm　重量402 g

前漢時代(前1～1世紀)

完形品。全面的に銹落しが施されている。平縁。外区は珠点入りの波文。3㎜の段差を経て斜行櫛歯文。内区は方格規矩文の四方に四頭の獣文を配する。朱雀、青龍、白虎、獣文で構成され、玄武の像はない。白虎や青竜の像の腹部を逆L字形文が切る。鈕座は四葉座。鈕は半球形で、鈕孔は縦長の三角形。方格と規矩の中に研磨による擦痕、四葉座と鈕に回転研磨による擦痕がみられる。鈕孔の延長上に表面が模糊とした状態の部分があり、湯口に関連するものとみられる。(森下)

(墨書等)蓋:守一「漢鏡」。蓋裏:朱文方印「南宋禅苑」－(不明)。布：「貴」印と「漢／TLV式／四神鏡／独山箱」。フダ:「漢鏡／TLV式四神鏡」。

9　鍍金方格規矩四神鏡

9　M321　鍍金方格規矩四神鏡

面径13.1cm　重量416ｇ

前漢時代(前１～１世紀)

完形品。緑色銹で覆われ、その下に赤銹がみえる。緑色銹は一部、鍍金の上にかぶっている。凸面鏡で平縁。外区は波文＋鋸歯文。外区と内区の段差は３㎜。内区外周に斜行櫛歯文をめぐらし、内区主文は、方格規矩文で区切った間に四神や獣文を置く。鈕座は四葉座。鈕は半球形で鈕孔は円形。鏡背面に鍍金が施されているが、縁部の外面には及んでいない。規矩文の中の擦痕が、鍍金の表面に浮き出ているようにみえる部分もある。(森下)

(墨書等)蓋裏：「濤聲閣㊀聚部」朱文長方印。布：「貴」印と「漢／渡金／ＴＬＶ式／神獣鏡」。

10　方格規矩四神鏡

10　M322　方格規矩四神鏡

面径16.7cm　重量619ｇ

前漢時代(１世紀)

完形品。黄緑色の銹で覆われているが、銹落しも施してある。凸面鏡で平縁。外区は雲気文＋鋸歯文。外区と内区の間は、２㎜の段差を経て櫛歯文＋銘帯と続く。銘文は「新有善銅出丹陽。和以銀錫清且明。左龍右扇掌三彭。朱爵玄武順陰陽。八子九孫治中央。家常□富宜君王。千秋萬歳樂未央。」。内区に方格規矩・四神文を表す。四神が揃っており、他は各種の獣文。方格は小さい乳で12に区分し、十二支名を入れる。半球形の鈕。鈕孔は円形と半円形。(森下)

(墨書等)蓋：守一「神代仿製鏡」。蓋紙：定三「ＴＬＶ式鏡」。フダ:「ＴＬＶ式／仿式鏡」。布：「貴」印と「漢／ＴＬＶ式／鏡」。

11　建安十年銘重列式神獣鏡

11　M330　建安十年銘重列式神獣鏡

面径13.1cm　重量441ｇ

（踏み返し品）

完形品。鏡面は緑色の錆のほか、赤色・青色の付着物がめだつ。付け錆か。平縁。銘帯＋界圏から内区に続く。銘文は「吾作明竟、幽湅宮商。周羅容象、五帝三皇。白牙單琴、黄帝除兇。白牙、朱鳥玄武、白扉青、建安十年五月六日作。宜子孫。大吉羊。」。内区は五段に区分し、神像・獣像を一方向に配置する。鈕の上下には方格があり、それぞれ「君宜」、「高官」の銘を入れる。鈕は頂部が平たい半球形。鈕孔は円形。鈕孔の底は鏡背面よりいちじるしく窪んでおり、鏡面に通ずる孔があく。文様の鋳上がりも鈍い。五島美術館、黒川古文化研究所、大阪市立美術館に欠損部の位置まで共通する同型品がある。後世のやや粗雑な踏み返し品と考えられる。（森下）

（墨書等）蓋：守一「重列神獣建安鏡」。蓋紙：定三「重列神獣建安鏡」。布：「貴」印と「漢神獣建安鏡」。

12　銘帯同向式神獣鏡

12　M350　銘帯同向式神獣鏡

面径11.2cm　重量159ｇ

三国時代（３世紀）

完形品だが、鈕座の周りにはヒビが入る。緑色～漆黒色の錆がみられる。赤色顔料状の付着物もある。化学分析ではバリウムホワイトを体質とした赤色のレーキ性顔料と考えられている。泥も付着。鈕の上面のみ錆落しがされている。

凸面鏡。斜縁で外区は渦文＋銘帯。銘文ははっきりと読み取れないが、文字をなしていない部分もあるようだ。鋸歯文を施した界圏＋半円方形帯へと続く。半円中に渦文。方格には一文字ずつ銘を記すが、これも読み取れない。内区は同向式の神獣鏡。下段は向かいあう二人の神像とそれをはさむ二頭の獣像。中段は左右に一体ずつの神像を置き、上段は獣像の上に向かい合う二体の神像を配する。鈕座は花文＋円圏。鈕は平たい半球形。鈕孔は円形。（森下）

（墨書等）蓋表貼布：「六神鏡」。布：「上代／仿製六神鏡」。

13　唐草文鏡

13　M325　唐草文鏡

面径10.5cm　重量172ｇ

三国時代（３世紀）

完形品。縁の端面に斜め方向の擦痕。緑色・青色の銹に覆われるが、白銀色の地肌がみえる部分も多い。全体として表面がとろけたように模糊としている。縁の一部に、湯がまわりきらずに窪んでいる部分がある。湯口に関連するものとみられる。

縁部は傾斜端面をもち、やや斜縁状。外区は波文。内側に低い界圏と斜行櫛歯文がめぐる。内区を四つの小乳で区分するが、その位置は等間隔でない。乳の間にＳ字状の唐草文を置く。鈕は湯まわりが悪く、形は不整形。鈕孔は一方は長方形。中国出土の類例から魏晋鏡と位置づけられる。（森下）

（墨書等）蓋：守一「仿製蕨手文鏡」「上代／仿製蕨手文鏡」と「淡如水」朱文長円印。蓋紙：「上代仿製／蕨手文鏡」。布：「貴」印と「上代／仿製／蕨手文鏡」。

14　三角縁・日月日日・唐草文帯四神四獣鏡

14　M347　三角縁・日月日日・唐草文帯四神四獣鏡

大阪・万年寺山古墳出土

面径21.9cm　重量1074ｇ　３世紀

完形品。鏡面側に緑色銹と一部赤銹で覆われる。横方向の筋がある。鏡面や鈕の頂部などに布付着。進行性の緑色銹が縁部などで目立つ。黒銹の場所もある。外区と文様帯に赤色顔料の付着がみられる。鏡背の半分くらいが銹に覆われており、半分の銹の少ない部分には赤色顔料が目立つ。

凸面鏡で三角縁。外区は外周突線をもち、鋸歯文＋波文＋鋸歯文と続き、斜面も鋸歯文。文様帯は櫛歯文＋方格日＋唐草文。銘は「日月日日」。界圏には鋸歯文。内区は四神四獣式。四つの乳で区分し、二つの乳の上には傘松形文様が乗る。ひとつの神像を二つの獣の像で挟む対置式の配置を示す。神獣像の表現は岸本直文分類の表現①。鈕座は有節重弧文。鈕は小型の半球形。鈕孔は長方形。鋳型の傷が唐草文から外区に伸びる。鈕孔方向の縁部はやや幅が狭い。詳細や評価については本書の岩本崇氏論文を参照。（森下）

14　三角縁・日月日日・唐草文帯四神四獣鏡の内区

（墨書等）蓋：守一「神獣鏡／大阪府北河内郡牧野村／字三矢出土」。蓋紙：「上代仿製／神獣鏡」と「淡如水」朱文長円印。布：「貴」印と「上代／四神四獣／鏡」。鏡面シール：「大阪府下／北河内郡牧／野村字三矢」。

15　竹叢双犀鏡

15　M343　竹叢双犀鏡

面径22.6cm　縁高0.65cm
縁幅（上面）0.4cm
重量1375g　唐時代（8世紀）

唐時代の銅鏡は、隋代以前の霊獣・神像や幾何学文が背面全体を埋め尽くす図様とまったく異なる、鳥獣や植物を空白の画面の中に描いた図様が主流となった。本鏡もその一種で、小さな半球形の鈕を挟み、2頭の大きな犀が向かい合う。上方には竹叢、下方に流水・岩と土坡に生えた花卉を描き、さらに四方に花を配して、残る空間に蝶を表している。

犀は、唐代の社会ではまだきわめて珍しい動物で、角が工芸の高級素材として南方から舶載され珍重されるなどした。白居易は、貞元十二年(796)に南海から進貢され、宮廷で飼われた犀が、長安の寒さで翌年に死んでしまったことを嘆いて、有名な「馴犀」の詩を詠んでいる。本鏡の図様も、想像をたくましくすれば、竹叢が禁苑、下の波が南海の犀の故郷を暗示するのかも知れない。

本鏡と図様をまったく同じくする同型鏡は比較的多く知られ、1面は甘粛省平涼の大中五年(851)唐墓から出土している。しかし、本鏡と同様の八花鏡で半球形鈕をもつ他の図様の鏡は、いずれも8世紀後半の紀年墓から出土するので、本鏡の製作も同時期まで遡ると考えられる。

なお本鏡図様と細部の異なる竹叢双犀鏡が上海博物館に収蔵されるが、蝶が雲、土坡が山岳に入れ替わっており、鈕頭も平坦化しているので、本鏡式を模倣したものとみられる。（久保）

（墨書等）布：定三「唐／双霊獣／鳥花流／水鏡」。

（参考文献）孔祥星『中国銅鏡図典』文物出版社　1992年。王綱懐・孫克讓『唐代銅鏡与唐詩』上海古籍出版社　2007年。

16　双魚鏡

16　M334　双魚鏡

面径13.0cm　縁高0.65cm
縁幅（上面）0.6cm　重量260g
金時代（12世紀）

中国銅鏡の長い歴史で最も異彩を放つのは金時代の鏡である。金は、12～13世紀に中国東北部から華北にかけての地域を版図として、女真族が建てた王朝である。彼らは漢民族の国家、宋の文化を取り入れ、銅鏡も積極的に用いたようで、中心地の黒龍江省や吉林省、旧高麗の朝鮮半島で、該期の鏡が大量に出土する。

金の人々は、漢文化への関心を鏡文様に投影したらしく、故事人物図など説明的な図像がひじょうに多い。本鏡の双魚図も、このような脈略から、金で大いに好まれた。魚［Yu］は“裕”と音が通じ、富裕の意味をもつ。中国で魚を飼うことがいつの時代も盛んであったのも、そのような含意を背景としている。

したがって、双魚鏡は事例が多く、形式化しながら元時代まで息長く続いた。しかし本鏡はきわめて稀なタイプで、素文の鏡背に朱漆で双魚文と水草を表している。また魚の鱗とおぼしき線刻模様を、漆を針で掻き取るように描くのも他例をみない。半球形の鈕、台形縁で、鏡背面の鋳型の仕上げが至って丁寧であることから、双魚鏡の中でも古い段階、すなわち金の盛期に製作されたとみていい。

もっとも、金時代は銅原料が決定的に不足していたので、銅鏡など生活必需品に限り、政府の験記官の許可の元に鋳造が認められた。金鏡の銅質がおしなべて良くないのもこの事情により、本鏡も鉛を多く含む軟質な青銅で、鏡面の劣化が著しい。周縁に「金□官」と細く線刻した銘は、前述の験記官の款記である。（久保）

（墨書等）蓋裏：貼紙に「淡如水」朱文長円印と定三「高麗／漆繪／双魚唐草鏡」。布：定三「高麗／漆繪／双魚唐草鏡」。

17　双鳳六花鏡

17　M335　双鳳六花鏡

面径（最大）16.9cm　縁高0.4cm
縁幅1.1cm　重量693g
南宋～元時代（13～14世紀）

鳳凰は中国で天帝の使者と認識され、神仙に棲む霊鳥とイメージされた。唐時代に鳳凰の一種とされる鸞を２羽、向かい合わせて表す銅鏡が現れたが、これは唐詩に登場する「鸞鏡」にもとづいたものらしい。『異苑』に、

> 罽賓国王が一羽の鸞を飼い鳴声を聞きたがったが、三年しても鳴かない。夫人は、鸞は友の姿を見て鳴くそうなので、鏡を懸けて映してみましょう、と提案した。その通りにすると、鸞は己が姿を見て悲鳴をあげて死んでしまった。

とある。この故事により、「鸞鏡」の語は、友や男女が相手を思うことを含意し、鸞を鋳出した鏡をも表現するようになった。

銅鏡の鸞・鳳凰文は、以後の五代、遼、宋、元を経て明時代まで連綿と用いられ続けた。とりわけ宋時代には、浙江省湖州周辺で量産された素文鏡（湖州鏡と総称される）が東アジア全域に流通する一方で、作行きの大きく異なる双鳳文鏡も、量は前者に及ばないながら、やはり日本・朝鮮半島からインドシナ半島ベトナムまで、きわめて広域に流通した。

この種の双鳳鏡の特徴は、一般的な半肉彫り文様でなく、背景のみを窪ませ、図様を平面的な凸線で表現することにある。これはまず版木のごとく文様を彫り表した木製原型を作り、それを型取りして鋳型を成形し鋳造するという製作技法が想定される。

本鏡もそのような双鳳文鏡の系譜に連なる六花鏡だが、類品より相当大型である。花形の中央を凹ませた形状の六花鏡は湖州鏡にしばしばみられ、13世紀後半から14世紀の紀年銘を有する例が南九州の神社伝来鏡に存在する。本鏡の製作年代も、それらに平行する時期と考えて大過ないであろう。（久保）

（墨書等）蓋表：貼紙に「淡如水」朱文長円印と定三「朝鮮／双鳳鏡」。蓋裏：「對雲閣主」朱文方印。布：定三「朝鮮／双鳳鏡／独山旧蔵」。

18　殿閣人物鏡

18　M344　殿閣人物鏡

面径21.7cm　縁高0.7cm
縁幅（上面）0.4cm　重量927g
朝鮮・高麗時代（11～12世紀）

大きな樹下に人物、橋上に一人の人物、たもとに火炎を背負った兎、左方にそれを眺める三人の人物、水表に龍が描かれ、向こうの殿閣の扉からも人影がのぞく。木村定三は箱の蓋裏に「兎捨身供養図」と記し、老人に食物を供養するため火に飛び込んだ兎（釈迦の前世）の本生図と解した。ただ、本図を道教の神仙図とみる説、竜宮図とみる説、法華経の龍女成仏図とみる説などもあり、いずれにせよ複数典拠による複合的な図像であろう。

本鏡と文様を同じくする同型鏡は、朝鮮半島北半を中心に出土例が多い。また韓国内の伝世鏡も数多く知られ、日本でも対馬の大吉戸神社に伝来する。このような分布状況から、朝鮮半島で製作された鏡式とみなされる。

一方、本鏡の図様を左右逆にした文様（ただし龍は描かれない）の八稜鏡・八花鏡も、中国華北から東北部、朝鮮半島にかけ出土し、対馬・大吉戸神社には八花鏡を元に作られた円鏡も伝わる。とくに、湖北省襄陽の崇寧三年（1104）宋墓から八稜鏡が出土しており、年代の一端が知られる。こちらの鏡式が本鏡式に先行するとの見解もあるが（黄貞淑『高麗銅鏡の研究　編年試図のための基礎研究』大邱カトリック大学校大学院碩士学位請求論文　2000年　原文韓国語）、なお検討を要する。ともあれ、この人物殿閣鏡が高麗時代半ばにさしかかる時期に、宋や契丹あるいは金との関わりの中で流行した大型鏡であるのは間違いない。（久保）

（墨書等）蓋表：守一「朝鮮／仙宮鏡」。蓋裏：貼紙に「淡如水」朱文長円印と定三「朝鮮鏡／兎捨身供養図」。布：定三「新羅／仙宮鏡」。

（参考文献）杉山洋『対馬の鏡』奈良文化財研究所飛鳥資料館　2004年。

19　鍍金海獣葡萄鏡

19（参考）M329　鍍金海獣葡萄鏡

面径20.6cm　縁高2.0cm

重量2900g

内区に6頭の狻猊、外区に4頭4羽の狻猊と鳥を交互にめぐらし、空間に葡萄蔓草を表した大型の海獣葡萄鏡。界圏が幅広で、鈕が伏獣形でなく半球形になり、一見して初唐の古式海獣葡萄鏡に見える。泉屋博古館所蔵鏡など類似の図様も挙げうる。

しかし全体に文様があまく、一方で背面全体に鍍金を施し、地金も暗茶色を呈するなど、古式海獣葡萄鏡とは異なる様相を示す。愛知県美術館における蛍光X線分析装置による測定によっても、ヒ素と鉛を若干含む純銅に近い組成であることが知られ、正倉院の中国鏡や、本鏡より新しい形式である高松塚古墳出土海獣葡萄鏡がいずれも20～25％程度の錫を含む白銅鏡であるという成瀬正和・杉山洋両氏の分析見解と大きく異なる結果となった。

本鏡と近似した成分様相を見せる海獣葡萄鏡は、東大寺法華堂天蓋鏡や奈良県クレタカ山火葬墓出土鏡などで、日本の奈良時代に踏み返された倣製鏡と目されるものである。ただ、愛知県美が同時に分析した17（M335）双鳳六花鏡が錫をほとんど含まず、ヒ素と鉛を相当含む、という結果に見られるように、中国における宋・元鏡や倣古鏡の一部も、似た様相を示す可能性が高い。

以上から、本鏡が初唐鏡である可能性は低いにしても、中国、日本のいずれの地域、時代に製作されたものかは、なお今後の研究を待たねばならない。いうまでもなく表面の鍍金は、倣製の時点、もしくはそれ以降に施されたものである。（久保）

（墨書等）蓋表：守一「鍍金／海獣葡萄鏡」。布：定三「貴」印と「隋／鍍金／海獣葡萄鏡」。

（参考文献）成瀬正和「正倉院鏡を中心とした唐式鏡の化学的調査」『古代の鏡』（日本の美術393）至文堂　1999年。杉山洋『海獣葡萄鏡研究図録』奈良文化財研究所飛鳥資料館　2007年。

20　仿製鼉龍鏡

20　M345　仿製鼉龍鏡

面径23.0cm　重量979g

古墳時代前期（3～4世紀）

（伝）京都府乙訓郡向日町乙女塚出土

完形品だが、外区には破片を接合した部分がある。接合部に隙間が若干空いており、白色物質と鏡表側に黄緑色の銹が付着。全体は暗緑色の銹。鏡面側は銹落しが強くおこなわれ、粗い擦痕が全面に残る。縁の一部に特に強い削り跡がみられる。ただし、地金がみえるほどではない。古い時期の出土を示すものか。鏡面の中央に直線状の長い傷あり。鈕の頂部と獣毛文の頂部にも直線状の大きな傷。鏡の縁部に銹落しによる凹凸がある。赤色顔料や布の付着はみられない。

凸面鏡。縁部はやや反りをもつ。外区は菱雲文で、菱形の中に二つの渦。その内側に櫛歯文＋断面三角形の界圏。界圏の頂部には凹線があり、内斜面は鋸歯文を施す。さらに内側に半円方形帯と低い界圏がめぐる。半円部は三つの渦が入る。内区は四つの乳で区画し、長い胴をもつ獣像・鉅・獣毛文を四組配する。獣像の胴部と獣毛文の間は、網代状の文様や渦文で埋める。獣像の頭部と胴部の間に隙間が空き、分離しかかっている。鈕座は低い界圏で櫛歯文を施す。鈕はやや頂部の幅が広い半球形。鈕孔は四角形。孔の底は鏡背面と同じ高さ。古墳時代前期の仿製鏡で、鼉龍鏡の中でも前半の型式。向日町(現向日市)は前期古墳群の集中する地域であるが、「乙女塚」という名の古墳は知られていない。(森下)

(墨書等)蓋：守一「**鼉龍鏡／京都府乙訓郡向日町／乙女塚出土**」。蓋紙：「**上代仿製／鼉龍鏡**」と「**淡如水**」朱文長円印。布：「**貴**」印と「**上代／鼉龍鏡**」。

21　仿製四獣鏡

21　M342　仿製四獣鏡

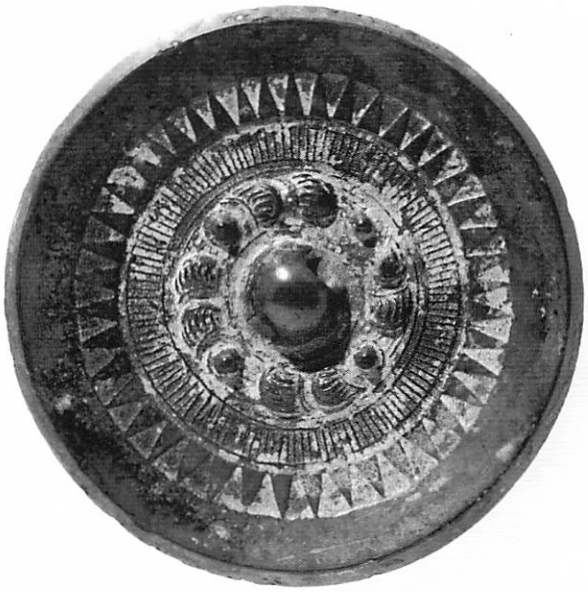
面径20.0cm　重量669g

古墳時代前期(4世紀)

鏡面の一箇所に打撃によると思われる深い窪みがあり、亀裂が入る。これによって全体が大きく歪むが、割れてはいない。緑色・青色・黒色の銹で全面覆われる。鏡背側に白色の粘土状の土が付着。やや赤みを帯びた部分もみられるが、顔料によるものか銹なのか不明。鈕の頂部に布らしき付着痕。鏡面にも布の付着。

凸面鏡で斜縁を呈する。外区は細い鋸歯文＋波文＋細い鋸歯文。外区と内区の厚さの差はわずかで、小さな段を介して櫛歯文に続く。その内側に断面三角形の界圏と半円方形帯がめぐる。界圏の頂部には凹線がある。半円は二つの渦。内区には乳がない。顔を正面に向けた獣像と頭部のみで鉅を銜えた獣が、各四体表される。頭部を正面に向けた獣像は、腰の中央から長い尾がのびる。鈕座は有節重弧文。鈕はやや高く、鈕孔は方形で口部分はあまり成形されていない。獣像表現や外区は、古墳時代前期後半の仿製鏡の特徴を備える。(森下)

(墨書等)蓋：守一「**神代仿製鏡**」。布：「**神代／仿製鏡／歪アリ**」。



22　仿製捩文鏡

22　M326　仿製捩文鏡

面径9.0cm　重量108g

古墳時代前期（4世紀）

完形品。ほとんど全体に銹落しが施されている。鏡背の一部に黄緑色の銹が残る。鏡面側は銀色に近い地金がみえる。外区の鋸歯文や櫛歯文の間などに赤色顔料が残る。

凸面鏡で斜縁。外区には一条の鋸歯文がめぐる。低い段を経て櫛歯文。内区は四つの小乳で区分し、その間に房状の捩文を置く。鈕座は円圏をめぐらす。鈕は半球形。鈕孔はほぼ半円形。古墳時代前期後半の仿製鏡。（森下）

（墨書等）蓋：守一「神代仿製鏡」。布：「神代／仿製鏡」。

23　仿製方格規矩鏡

23　M346　仿製方格規矩鏡

面径16.0cm　重量393g

古墳時代前期（4世紀）

（伝）大和石上神宮出土

完形品。緑色と茶色味を帯びた銹で全面覆われる。鏡背の内区に赤色顔料が残る。鏡背側には泥の付着もみられる。

凸面鏡。縁は断面三角形状に小さく突出し、文様と間に屈曲部をもつ。外区は菱雲文＋鋸歯文。菱形内に三つの渦をもつ。小さな段を経て櫛歯文と突線に続く。内区は方格文、T字・V字・逆L字形文と八つの小乳を配し、その間に獣文を表す。銹のためによくみえないが、鳥頭状の獣文を置く。逆L字形文の内側に四つの渦巻き文を表す。方格・V字形文には歪みがある。方格内に四つの小乳を置く。鈕座は段をもつ円圏。鈕は半球形。鈕孔は隅丸の長方形。鈕孔の底は鏡背面と一致する。古墳時代前期後半の仿製鏡。（森下）

（墨書等）蓋：守一「仿製四神鏡／大和石上神宮出土」。布：「石上神社／仿製／TLV式／四神鏡」。箱側面右スミ貼紙：「一八　三ツ亀□」。

24　仿製重圏文鏡

24　M356　仿製重圏文鏡

面径6.5cm　重量60g

古墳時代前期（3～4世紀）

完形品。縁の一部に亀裂があり、鏡背側に及んでいる。濃い緑色の錆で覆われるが、全体に研磨が行われたようであり、粗い擦痕がみられる。縁部の角も削られている。

凸面鏡で低い斜縁。外区は素文で、内区との間は小さな段をもつ。その内側に櫛歯文と三重の圏線をめぐらす。圏線の間隔は不均等。重圏文鏡にしばしばみられる、珠点を連ねた線ではない。鈕座は段をもつ幅広の円圏。鈕はやや尖り気味の半球形。鈕孔は隅丸方形で、鈕孔底は鏡背面と一致する。内区の一部に鋳型の破損による文様のつぶれがみられる。（森下）

(墨書等)布：「上代／仿製鏡／「「カーボーイ帽」」/DFF　CA」。

25　仿製四獣鏡

25　M324　仿製四獣鏡

面径9.8cm　重量114ｇ

古墳時代中期（5世紀）

完形品だが、粗い研磨により縁がわずかに欠損。鏡背・鏡面ともに全面的に銹落としが施されているが、一部に緑色の銹が残る。地金がのぞく部分は銀色を呈する。内区の一部に泥が付着する。

凸面鏡。低い斜縁で鋸歯文との間に屈曲部をもつ。外区文様は細い鋸歯文＋波文＋細い鋸歯文。外区から内区にかけて連続的に厚さを減じ、内側の鋸歯文を外傾させて擬似的な段を形作る。内側の鋸歯文は細く、櫛歯文状を呈する。内区は四つの乳で区画し、四つの獣像を配する。獣は首を後ろへ長くのばし、小さな頭部をもつ簡略な形式。鈕座は有節重弧文の変形。鈕は半球形。鈕孔は四角で、鈕孔底は鏡背面と一致する。内区の一部に鋳型の破損による文様のつぶれがみられる。

外区と内区の間の段が不明瞭な点や、外区の櫛歯文状の鋸歯文などは、古墳時代中期中葉の仿製鏡の特徴を示す。（森下）

(墨書等)蓋裏：守一「仿製乳文鏡」。蓋紙：「上代／仿製乳文鏡」。布：「貴」印と「上代仿製／乳文鏡／黒色錆」。蓋：定三「上代／仿製乳文鏡／黒銅錆」と「淡如水」朱文長円印。

26　仿製珠文鏡

26　M327　仿製珠文鏡

面径8.8cm　重量90 g

古墳時代中期（5 世紀）

完形品。全面に銹落しが施されているが、一部に緑色の銹が残る。文様間には赤色顔料もみられる。

凸面鏡。斜縁。外区と内区の間に段はない。外区は鋸歯文＋複合鋸歯文状の波文。圏線をめぐらし、内区には多数の珠文を表す。おおむね珠文を三重にめぐらす。鈕は半球形。鈕孔は隅丸方形で、その底は鏡背面と一致する。鈕孔の口部分周辺に鋳くずれ痕が目立つ。外区の鋸歯文や波文にも文様のつぶれがみられる。

外区の波文は粗雑化したもので、段がない点など古墳時代中期後半の仿製鏡の特徴を示す。（森下）

(墨書等)蓋：定三「神代仿製鏡」。札：「仿製鏡」。布：「上代／霰鋸刃文／仿製鏡」。

27　仿製乳文鏡

27　M323　仿製乳文鏡

面径9.8cm　重量90 g

古墳時代後期（6 世紀）

完形品。鏡面と鏡背の外区に軽い銹落しが行われ、擦痕が残る。全体は黄緑色の銹でおおわれている。外区に三つ以上の窪みがあって、文様の一部がつぶれている。銹によるものか鋳造時に欠損したものか不明。

凸面鏡。斜縁で外区は櫛歯文＋波文の崩れた線文がめぐる。外区と内区の間に段はない。内区は十個の小乳をめぐらし、周囲に葉脈状の線文を施す。鈕座は圏線。鈕は小さくやや平たい半球形。鈕孔は円形で、一方はかなり小さい。鈕孔の口の周囲に鋳くずれ部がめだつ。外区の文様や形態は古墳時代後期の仿製鏡の特徴を示す。（森下）

(墨書等)蓋：守一「仿製乳文鏡」と定三「上代／仿製乳文鏡」と「淡如水」朱文長円印。蓋紙：「仿製乳文鏡」。布：「貴」印と「上代／仿製／乳文鏡」。

28　仿製五鈴乳脚文鏡

28　M352　仿製五鈴乳脚文鏡

面径8.0cm（鏡本体）　重量62ｇ

古墳時代後期（５～６世紀）

完形品。全面に銹落しが施されているが、鏡面の一部などに緑色の銹が残る。外区の一部に鋳くずれがみられる。

直径約１cmの鈴を五つ付ける。鈴口の一方の端は、鏡面と一致する。丸は小石で、四つ残る。斜縁で、外区は一条の鋸歯文。その内側に櫛歯文＋擬銘帯。内区には、六つのオタマジャクシ状の乳脚文をめぐらす。内区外周に半円文がみられる。鈕座は圏線。鈕は小さな半球形。鈕孔は隅丸方形。鈕孔の底は鏡背面と一致する。古墳時代後期の仿製鏡。（森下）

(墨書等)蓋表：「五鈴鏡　二寸六分五厘」と紙目付「古香庵蔵」朱文方印と「・・・古香庵蔵」朱文長方印。蓋裏：「金吾［識］」。布：「貴」印と「上代／蕨手文／五鈴鏡」。

29　仿製五鈴乳脚文鏡

29　M351　仿製五鈴乳脚文鏡

面径9.7cm（鏡本体）　重量92ｇ

古墳時代後期（６世紀）

(伝)美濃国揖斐郡清水村字小山口出土

外区の一部を欠損し、内区に向かって亀裂が入る。鈴の一部にも欠損がある。部分的に黄緑色の銹で覆われる。泥も付着。全体によく研磨。

周囲に幅1.5cm、長さ1.3cmの鈴を五つ付ける。鈴口は一方の端が鏡面と一致する。鈴の中には小石が入る。外区には櫛歯文＋櫛歯文＋擬銘帯をめぐらす。二重の櫛歯文は内側の線と外側の線を一度に引いた部分がほとんどであるが、一部に別々に線を引いた箇所もある。内区はオタマジャクシ状の乳脚文を七個めぐらす。鈕座は小さな段の圏帯。鈕は半球形。鈕孔は隅丸方形で、鈕孔底は鏡背面と一致する。古墳時代後期の仿製鏡。

山川七左衛門旧蔵鏡。その所蔵鏡図録集の『梅仙居蔵日本出土漢式鏡圖集』（1923年）第18下に掲載。（森下）

(墨書等)蓋：「五鈴鏡」金字。札：「五鈴鏡」。蓋裏：「美濃国揖斐郡清水村／字小山発掘五鈴鏡を見て／いにし弊(へ)をしのぶ／心茂(も)ますかがみたか／手にもちし㊟／㊟なるら舞(む)／大正五年八月／健自」。布：「貴」印と「揖斐郡出土／五鈴変形乳文／鏡／古鏡聚英／所載」。箱内紙：「一六　五鈴變形乳文鏡／岐阜縣揖斐郡清水村東小山／出土」。箱側面貼紙：「一八ノ二　［五］、美［濃］」。

30　仿製四鈴巴文鏡

30　M337　仿製四鈴巴文鏡

面径6.3cm　重量45ｇ
古墳時代後期（６世紀）
（伝）上野国群馬郡出土

完形品。全面に銹落しが施された模様であるが、白銀～黒色を呈する。出土後に何らかの処置を施されたものと考えられる。外区に小さな窪みあり。文様の鋳上りはやや甘い。

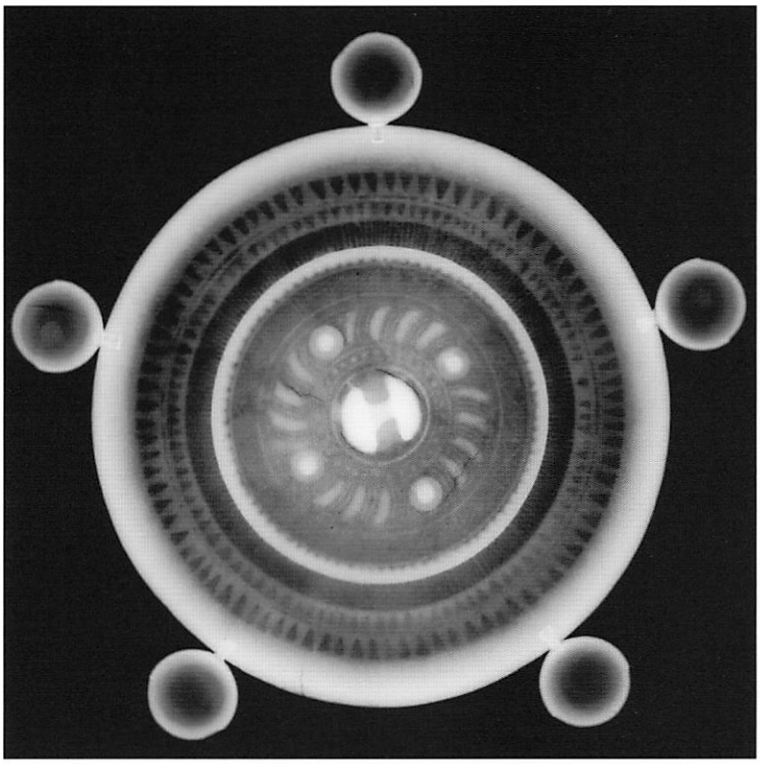
直径約１cmの鈴を四個付ける。うち二つには小石の丸が残る。鈴口の一方の端は鏡面と一致する。

緩やかな斜縁をもち、外区と内区の間に段差はない。外区は櫛歯文＋櫛歯文。縦線は一度に引いたもので、中央に圏線を引いて分割する。内側の櫛歯文の中央には、別の圏線の痕跡がある。内区は五つの巴文。鈕はやや尖り気味の半球形。鈕孔は隅丸方形。鈕孔底は鏡背面と一致する。

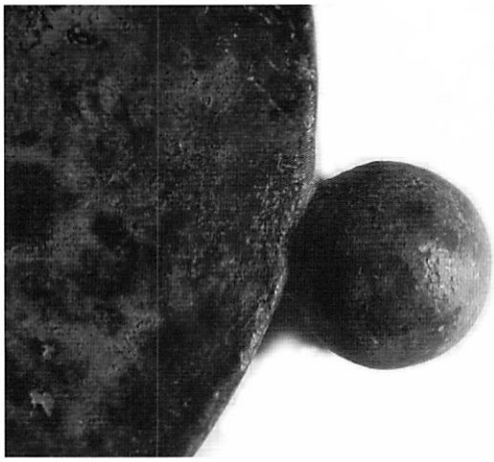
山川七左衛門旧蔵鏡。その所蔵鏡図録集の『梅仙居蔵日本出土漢式鏡圖集』（1923年）第19下右に掲載。（森下）

（墨書等）蓋：定三「四鈴鏡」と「淡如水」朱文長円印、シール「佐伯信㊀」と「歴」朱印、「一五六」。布：「貴」印３箇所と「上代／四鈴鏡／上野国群馬／郡出土」。

31　仿製五鈴捩文鏡



31　仿製五鈴捩文鏡
X線写真



31　鈴の接合部

31　鈕

31　M348　仿製五鈴捩文鏡

面径12.6cm（鏡本体）　重量283ｇ

完形品。全体は緑色の銹で覆われる。鈕の周辺で圧力による歪みが生じており、鏡面側には亀裂状の窪みもみられる。鏡面側は銹落しによるものらしい粗い擦痕が目立つ。鏡背側の鈴の取り付け部分には泥状の銹がのるが、鈴の接合部を誤魔化すための付け銹と考えられる。外区の一部に、赤色顔料がみられる。

２cm程度の大きさの鈴を五個つける。中の丸は、Ｘ線写真から小石状のものとみられる。鈴口は鏡本体とおおむね平行するが、やや傾きをもつ。鏡の縁部はかなり丸みを持っている。鈴はこの丸みの上に直接つながっており、研磨や使用によって鏡が磨り減った後に、この鈴が付けられたことを示す。

この鈴はＸ線写真から、枘を用いて本体に接合したことが明瞭にわかる。枘は鈴の内面側に突起があり、また反対側は少し広がりをもつ。鈴と鏡の間の隙間、枘の先の部分にＸ線で白く抜けた部分がみられ、金属を用いた接着剤が使用されている可能性が高い。32（M336）鏡と比べると、鈴や枘部分のＸ線の抜け方が異なる。鏡の本体も縁の部分の丸まり方や鈕孔の広がりなどをみると、本体は磨滅が進んだ出土品で、それに後から鈴をつけたものと思われる。古墳時代の鈴鏡は本体と一鋳品であるが、本例は後世に鈴が付けられたことを示す。

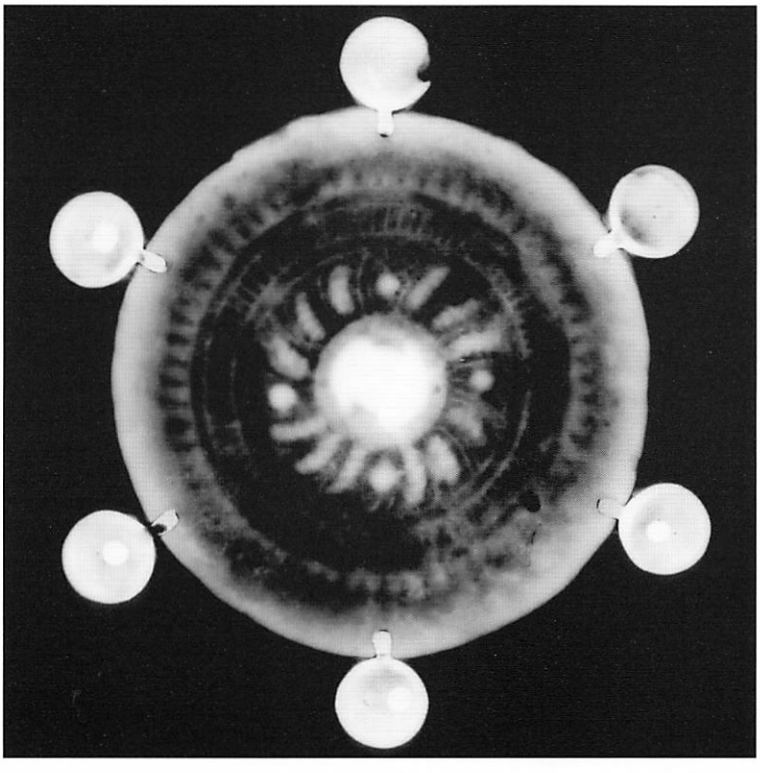
鏡本体は凸面鏡。外区は鋸歯文＋鋸歯文。小さな段を介して櫛歯文＋断面三角形の界圏＋擬銘帯へとつながる。界圏には鋸歯文を施す。擬銘帯はＺ字形やＸ字形の図形で構成。内区は四つの小乳で区分し、羽根文状の捩文を施す。鈕座は連珠文と圏線をめぐらす。鈕は鏡の大きさに対してやや小さめで、鈕孔が大きく広がり、鈕の頂部は橋状に残る程度である。文様の表出は全体に甘い。

後世に鈴をつけたという点では、次の32（M336）と共通する。しかし本鏡の本体は出土品と考えられ、枘を用いた鈴の接合方法など、技法的には違いがある。

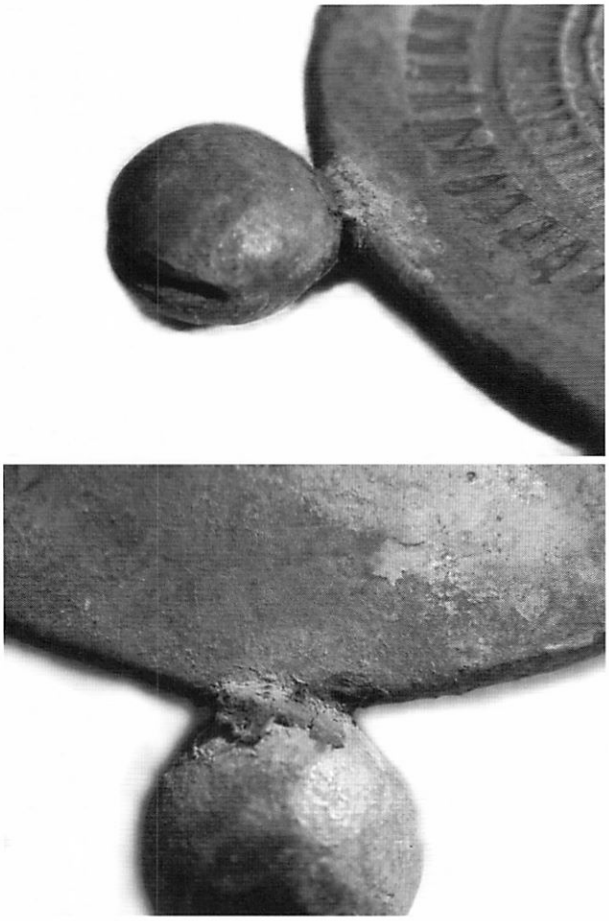
山川七左衛門旧蔵鏡。その所蔵鏡図録集の『梅仙居蔵日本出土漢式鏡圖集』（1923年）第17に掲載。（森下）

（墨書等）蓋：定三「五鈴綟形紋鏡」と「淡如水」朱文長円印。蓋シール・箱シールの双方に：「歴」朱印と「一五六」「佐伯信男」。布：「貴」印と「上代／五鈴綟文鏡」。

32　仿製六鈴捩文鏡



32　仿製六鈴捩文鏡
X線写真



32　鈴の接合部

32　M336　仿製六鈴捩文鏡

面径8.7cm（鏡本体）　重量76ｇ

（伝）摂州高槻武烈御陵出土

完形品。黄緑色の銹で覆われる。鏡面側に布の圧痕がある。縁は凹凸が激しい。

直径1.4㎝程度のやや扁平な鈴が六個付く。31（M348）と同様、後から鈴をつけたもの。鈴口は鏡面に対しておおむね平行するが、やや傾いたものもある。X線写真によると、鏡本体に枘穴をあけ、そこへ鈴の突起を枘として差し込み固定している。鈴の部分の枘部分はX線の抜けが鏡本体より悪い。鈴のうちの一個は、接合部分に茶色の付着物があり、付銹とみられる。鈴は愛知県美の蛍光X線分析装置による測定によると、鉛とヒ素が主成分を占めている。鈴の丸は球形でX線の通りが悪く、金属製の可能性が高い。

本体は通有の捩文鏡の特徴を備える。凸面鏡。外区は鋸歯文。内側に櫛歯文をめぐらす。内区は四つの小乳で区分し、羽根状の捩文を表す。鈕座は小さな段をもつ円圏。鈕は半球形だが、その頂部には、棒状部分をもぎ取ったような凹凸のある円形部分がみられる。湯口に関係したものか。鈕孔は隅丸方形で、鈕孔底は鏡背面よりやや浮く。鈕の周囲などに文様のつぶれがみられる。

出土品を後世に踏み返し、鉛製の鈴を後付けしたものと考える。布痕は踏返しによって写されたものか。鈴の付け方は巧妙であり、製作者は出土品の鈴鏡について知識を有していたと考える。

田中琢1979『古鏡』日本の原始美術８（講談社）では、こうした捩文鏡の鈴鏡の存在を根拠に、鈴鏡の出現年代を引き上げる見解が示された。しかし出土品による限り、古墳時代前期に位置づけられる仿製鏡に鈴鏡の例はない。また逆に確実な出土品の鈴鏡の文様や形態は、古墳時代中期後半以降の仿製鏡として説明できる。本例の検討により、鈴付の捩文鏡が後世の模造品であることが確実となった。こうした鈴を後付した模造品は他にも知られるが（羅振玉1916『古鏡圖録』上15ほか）、手の込んだ細工からみて、単なる贋造品ではなく祭祀用品であった可能性が高い。

山川七左衛門旧蔵鏡。『梅仙居蔵日本出土漢式鏡圖集』（1923年）第18上掲載。（森下）

（墨書等）蓋：「上代鏡／摂州高槻／武烈御陵出土」。布：「貴」印と「摂州高槻／六鈴鏡」。

平安・鎌倉時代の鏡

33　山吹薄蝶鳥鏡

33　M340　山吹薄蝶鳥鏡

面径10.1cm　縁高0.55cm
縁高0.2cm　重量105g
平安時代(12世紀前半)

平安時代後期には、やまと絵や北宋花鳥画にも通じる、植物・鳥・流水などの自然景物を表した鏡、「和鏡」がみられるようになる。多様で優美な文様表現は、同時期の大陸鏡をはるかに凌駕するものだった。木村定三氏が、日本鏡の蒐集対象を古墳時代鏡と平安・鎌倉時代の鏡に限定したのも、そのような美の特質を理解していたからであろう。

本鏡は、細縁の周縁が上方へ薄くなりつつ直立する12世紀代の鏡胎形で、鈕は半球形、素鈕。外・内区に段差のつく、平安前期からの古い特徴を残す。鏡背には、山吹らしい折枝文と蝶文を散らし、下半に薄を表す。花の折枝文は、早い時期の和鏡に見られる。上下の文様間に右方向へ飛ぶ小鳥を2羽表すが、長く尖った尾形も古様である。ただ外区やや下寄りの小文を木村氏は蜻蛉とみているが、判然としない。これらの諸点から、製作年代はほぼ12世紀前半とみていい。(久保)

(墨書等)蓋紙：定三「延喜時代／草花鳥蝶蜻蛉鏡」。蓋裏：貼紙に「淡如水」朱文長円印。布：定三「貴」朱印と「延喜／草花鳥蝶／蜻蛉鏡」。札：定三「延喜鏡／草花鳥蝶蜻蛉」。

34　草花蝶鳥鏡

34　M354　草花蝶鳥鏡

面径11.0cm　縁高0.8cm
縁幅0.2cm　重量260g
平安時代後期(12世紀前半)

平安時代後期の和鏡にみる古様な作風を湛えながらも、他例をみない意匠表現まで同居した瞠目すべき鏡。錫を多めに含む白銅質の鏡で、厚い鏡胎に破綻のない文様を精良に鋳出す。内・外区を分かつ界圏に段差がつく鏡胎と、小鳥や植物を鈕対称に配する構図は、平安時代を通じみられた瑞花双鳳八稜鏡から続く要素で、とくに藤・松の折枝文や蝶文を散らすのは、11世紀後半から12世紀にかけ蒔絵や料紙装飾でも流行した同時代意匠である。また尾羽根を長く伸ばした小鳥の姿態も、初期和鏡に特有の表現である。以上の諸点から、本鏡の製作時期は12世紀前半頃にほぼ絞り込める。

ところが一方で、梅花形の鈕座や外区の細かな唐草は、当該期の鏡としてはきわめて珍しい。その遡源は判然としないが、同時期に盛行した瑞花唐草五花鏡の、外形や細かく展開する唐草文と関係があるかも知れない。と

もあれ創意性に抜きん出た稀代の和鏡というべきである。(久保)
(墨書等)布：定三「貴」印と「藤原／藤撫子蝶鳥／鏡」。

35　松喰鶴鏡

35　M359　松喰鶴鏡

面径9.2cm　縁高0.5cm
縁幅0.2cm　重量59g
平安時代後期(12世紀後半)
伝岡山県鏡野町香々美藤屋経塚出土

33（M340）山吹薄双鳥鏡と同じく細縁の鏡で、胎がより薄い。鉛を多めに含む青銅鏡で、暗緑色の古色を呈する。このような胎の鏡は12世紀半ばから後半の経塚より出土する。円錐形の捩菊座鈕も、同種の鏡に特有のもの。鏡背には２羽の鶴が松枝を銜え旋回する文様を鋳出す。平安後期の松喰鶴鏡には、鶴を写実的に肉取るタイプと、輪郭線のみで表すタイプがあり、また双鶴が内向きに旋回するタイプと外向きに旋回するタイプがある。本鏡はいずれの要素も前者に属する。ただ同構図の類品に比べ、双鶴の翼が平行となり、硬い印象を与えていて、やや新しい傾向が窺える。なお外区に藤花を表すので、戦前の和鏡研究の泰斗、廣瀬都巽は「藤喰鶴鏡」と箱書するが、実際に鶴が喰うのは松で、通例どおりである。(久保)
(墨書等)鏡面貼紙：「高橋」朱文長円印。蓋表：廣瀬都巽「古鏡」。蓋裏：都巽「藤原時代／藤喰鶴鏡／美作國苫田郡香々美村／大字香々美字藤屋経塚／出土／故高橋健自先生珎玩／之一節に鑑賞之餘識す／昭和七年十一月下浣／都巽(印)」。蓋紙：「藤原藤喰／鶴之鏡」。布：定三「貴」印と「藤原／藤喰鶴鏡」。

36　荒磯雲鶴鏡

36　M332　荒磯雲鶴鏡

面径10.0cm　縁高0.55cm　縁幅0.1cm
重量62g　平安時代後期(12世紀後半)
伝奈良県金峯山(天川村山上ケ岳)出土

35(M359)松喰鶴鏡と同じ鏡胎と鈕形式で、しかも双鶴を主文様としながら、全体の図様はすこぶる個性的である。12世紀に定型をみた和鏡の文様構図は、草花や樹が右下方の土坡から立ち上がって左上方へと展開し、左方に開いた空間に双鳥文が配される、というパターンであった。ところが本鏡は、大きな岩礁が左側に描かれ、そこへ波が打ち寄せて、岩上に松樹が立つという荒磯文が、定型とは左右逆の構図で表される。また右方の空間では大きな鶴が舞い降りようとし、波間にはもう1羽の鶴が降り立っているのだが、こちらはよく見ると頸を大きく曲げた奇妙な見返りの姿勢をとる。さらに2羽の鶴の間には、この種の松鶴文鏡にはあまり採用されることのなかった飛雲文まで描くのである。左半の荒磯文がしなやかな箆押しによる至極こなれた図様であるのと対照的に、右半の雲鶴文は、個々の文様を嵌め込んだごとき、どこか不自然な印象を与えている。これはおそらく、常と違う文様を描こうという明確な意図が当初から製作者にあって、荒磯文の図様決定を優先させた結果であろう。

なお熊谷守一は本鏡に「蓬莱鏡」と箱書する。長寿を含意する鶴に、松と岩礁、波が重ねられることにより、古代中国で説かれた東海中の理想郷で、神仙が住み不老不死の霊薬があるとされる蓬莱山のイメージに近づく。最終的には、海中でこの山塊を背負うという亀も加わった独自の蓬莱文鏡が南北朝～室町時代に流行し、その系譜は近世末まで連綿と続いた。本鏡はそのような蓬莱文鏡の展開過程で現れた異形の作例といえようか。(久保)

(墨書等)蓋表：守一「蓬莱鏡」と貼紙に「淡如水」朱文長円印と定三「藤原時代／蓬莱鏡／金峯山出土」。蓋紙：定三「藤原時代／蓬莱鏡／金峯山出土」。布：定三「貴」印と「藤原／蓬莱鏡／金峯山／出土」。

37　松喰鶴方鏡

37　M349　松喰鶴方鏡

縦10.4cm　横10.4cm　縁高0.3cm
重量159g　平安時代後期(12世紀)

鶴は、中国の思想・故事を根拠に長寿、不老不死を象徴する意匠で、日本鏡の意匠にも早くから導入された。11世紀初めに成った『拾遺和歌集』に、

かがみいさせ侍りけるに、つるのか
たをいつけさせ侍りて　伊勢
千とせもなにかいのらんうらにすむ
たづのうへをぞ見るべかりける

とあり、また同じ頃の源道済の歌集『道済集』にも、

いけのうへのこほりにたづのおりぬ
るをかがみのうらとおもひけるかな

とあって、文様を表す鏡の「裏」面と水辺の「浦」をかけ、そこに佇む鶴を巧妙に詠み込む。早くもこの時期に鶴文の鏡が製作され、長寿への想いが込められたことがわかる。

もっとも、伝存品は1世紀以上遅れ、12世紀半ば頃から後半にかけて流行する。本鏡は35（M359）と同様の松喰鶴文を方鏡に取り入れた作例である。鈕に座をもたない素鈕で、台形の断面をなす周縁をめぐらした方形の鏡形態は、平安時代後期に日本へ舶載された中国・北宋代の銅鏡の要素を取り入れたもので、鎌倉時代後半までみることができる。（久保）

(墨書等)蓋表:守一「松喰鶴方鏡」と貼紙に「淡如水」朱文長円印と定三「藤原時代／松喰鶴方鏡」。蓋紙：定三「松喰鶴方鏡」。布：定三「貴」印と「藤原／松喰鶴方鏡」。

38　菊花双鳥鏡

38　M360　菊花双鳥鏡

面径9.6cm　縁高0.6cm
縁幅0.1cm　重量68g
平安時代後期(12世紀中頃～後半)

36(M332)荒磯雲鶴鏡や35(M359)松喰鶴鏡と同じく、薄手の鏡胎に捩菊座の鈕を設けた鏡である。この鏡胎形式は、12世紀半ばから後半にかけて各地で造営された経塚から出土する鏡にしばしば見られる。本鏡は、厚さ1mm前後ととくに薄く作られ、鏡背に文様を表す箆押しも、なめらかでごく薄肉である。

円形に大きく開いた菊花文もこの時期の鏡文様に特有の表現である。本鏡のごとく菊の茎が鈕を貫く構図のものと、菊が右手の土坡に咲いて左上方へとなびく構図、あるいは菊花折枝文を散らすものなどがある。いずれも小鳥は必ず2羽描かれるが、33(M340)山吹蝶鳥鏡のそれに比べ、尾も体躯もやや小さめで、製作年代はやや新しいとみられる。(久保)

(墨書等)蓋表：香取秀真「たち菊/飛鵲鏡/藤原時代/金峯山出土」。蓋裏：秀真「重二十匁径三寸二分/藤原時代製/傳金峯山出土/秀真(朱文方印)」。布：定三「貴」印と「藤原/立菊飛鵲鏡」。

39　洲浜萩双鳥鏡

39　M353　洲浜萩双鳥鏡

面径9.0cm　縁高0.7cm
縁幅0.3cm　重量96g
鎌倉時代(12世紀後半～13世紀前半)

やや幅広の周縁が直立する小型鏡で、ごく扁平な円錐形の鈕に、花蕊の頭のみを細かく連ねる花蕊座を設ける。この種の鏡胎形式の鏡は、ちょうど1200年前後の紀年銘資料をもつ経塚から出土しており、鎌倉時代初め頃に製作されたものと見られる。

鏡背の外区に形式化した水波文をめぐらし、結果として内区文様が小さく稠密に描かれるところも、38(M360)菊花双鳥鏡や36(M332)荒磯雲鶴鏡など、界圏の存在を頓着せずに大きく文様を表した鏡と比べ、製作年代の新しさを物語っている。

とはいえ、洲浜から茂る萩叢が風になびく様は、王朝時代のやまと絵の余香をいまだ濃厚に留めている。一方、鈕の左下に雀らしき小鳥が戯れる様を描くのは鎌倉時代和鏡の定番である。さらに、萩にかかる蜘蛛の巣と、洲浜に蟹と思しい小動物を描くのはきわめて珍しく、鏡製作者の遊び心といっても差し支えないであろう。(久保)

(墨書等)蓋表：守一「鎌倉時代/山吹/雀/蟹/蜘蛛/鏡」。蓋裏：貼紙に「淡如水」朱文長円印。布：「鎌倉/山吹 雀 蟹/蜘蛛 鏡」。

製作地・時代不明

40　素文鏡

40　M339　素文鏡

長軸3.7㎝・短軸2.7㎝　重量6g

二片に割れている。全面黒味を帯びた銹で覆われる。形は不成形な楕円。縁部は研磨がされておらず、凹凸がある。鏡背面にも研磨の施された形跡はなく、ざらざらした面が残る。鏡面側は研磨されており、平滑になっている。

文様は中央辺りに楕円形の粗雑な圏線が一條めぐる。鈕は小さな半球形。鈕孔は不成形な四角。鈕の頂部はやや研磨されている。時代、製作地不明。(森下)

(墨書等)蓋：守一「仿製寸鏡」。蓋裏：「淡如水」朱文長円印。布：「貴」印と「上代/仿製寸鏡」。札：「仿製寸鏡」。

41　小型鏡

42　小型鏡

41　M338　小型鏡

面径4.6㎝　重量18g

完形品。全面緑色の銹で覆われ、鏡背側は緑色の付着物が目立つ。付着物の下に赤色の物質がみられる。

凸面鏡で縁は小さく突出し、その内側に二重の圏線をもつ。内区に四つのふくらみが見られるが、文様の詳細は不明。鈕は小さな半球形。鈕孔は円形。いわゆる儀鏡か。(森下)

(箱書)蓋：「山川」白文方印。布：「上代/寸鏡/二」。

42　M338　小型鏡

面径　3.4㎝　重量14ｇ

状態：M338-1と同じ色の銹で覆われる。ほぼ平たい。

縁部はやや厚く、小さな段をもつ。文様は不明。鈕は小さな半球形。鈕孔は円形。(森下)